



基本CG:7枚



幽霊な彼女と やりまくりな日々

〜清楚系巨乳JK(幽霊)と
付き合い始めたから
かなりHでした

- やりまくり正常位
- 水着でパイズリ
- 壁尻即ハメ中出し
- 69朝フェラ
- 露天風呂で手コキ
- 私服で青姦
- 淫乱騎乗位

幽霊の彼女と初エッチをしたあなたは、そのまま寝ずにセックスを
「エッチなことって恥ずかしいだけだと思っちゃいました」
「あなただけが私の初めてでよかった♡」
「恥ずかしいが、屋の彼女でも、今だけはどんなエッチなことも
聞いてくれるだろう。」

「もつとしますか？」
「純粋な瞳が妖艶さを孕んだ。」
「私のもつとしたいです♡」
「またあなたのためにおちんちん

「私のおまんこを滅茶苦茶にしてください♡」
「普段の真面目な姿からは想像もできない言葉が彼女の口から飛び出



「んあああっ♡あああっ♡またおちんちん動きましたあっ♡」
「まだ出して一分も経ってないのにどんどんガチガチに勃起してき
腰を激しくすればするほど彼女は悦ぶ。

「気持ちいです…っ♡もっとお…もっとおセックスしましろうっ♡

「一緒に気持ちよくなっってくださいいいいっ♡」

「エッチの相性は最高のようだ。もとは一つだったかのように
あなたと彼女はとけあい、とろけあう。
そして、最高の快感を胸に抱えたまま膣奥で、また、射精をした。」



「私っ…：わらひっ、イっちやいますうううう♡」
「涙と汗と精液でくしゃくしゃになった顔が、快樂でさらに歪んだ。
「イクうううううう♡もうらめえええ♡」
「彼女は舌を突き出し、だらしなぐ喘いだ。」

「…あうう…：こんな自分…：初めて知りました…：うああ…：どうしまし
「エツチに目覚め始めた誠実で真面目な彼女がどうなるかはあなた
「私…：エツチ…：…ですか？」



「おっぱい、
ですが？」

海辺でデート中。
あなたの選んだ水着を着て彼女は上機嫌。
夏の勢いも借りて大胆にパイズリしてくれ

「私のおっぱい好きなんで
…だったらこうしてあげ
慣れない手付きでパイズ
水着がずれて勃起した乳
「わ、私は幽霊だから周り
平気です…だから好き
いいですよ…♡?」
「ぺちゅ、れろ♡…おちん
するんですね…ふふ喜ん
舐めちゃいます♡」
大胆な彼女の行動にたま
こみ上げる。

「あわわっ……す、すごい出てます♡
おちんちん暴れてますよ♡」
夏の暑さも重なって爆発したような勢いで
彼女の白い肌や水着を汚していく。

「こんななに気持ちよくなっ
恥ずかしいの我慢したか
デートはまだ始まったば
「なんか動いたらお腹空
……向さうに海の家があ
そこでご飯にしませんか
この夏は一生の思い出に



部屋に戻ったら彼女が壁に埋まっていた。
「助けてくださいっ……その……
甘酒で酔ってしまっ……
気づいたら壁に嵌ってしまいました……」

えい

む、む

冷静になるよう促すが、彼女はもう一時間
体勢らしく、パニック状態だ。

「うあああ、怖いですよおっ……私一生こ
なんでしょうか？でも私幽霊でしたっ！
だったら永遠に……このまま!?」
あなたは彼女を落ち着かせるため、大胆か

はっ!

「んあああああっ！……えっ、何で今!?えっ？」
問答無用でセックスを始める。

「ちよ、ちよっと待っててくださいいっ
…今はそんなことしてる場合じゃっ

…んああ♡」
ガンガンと腰を打ち続けると、
次第に彼女の口数も少なくなり、
セックスに没頭し始める。

「あっ、ああっ♡んああっ♡ああっ♡」
媚肉の打ち付け合う音と彼女の喘ぎ超えだ
「んあああっ♡気持ちいいっ♡私イきさそうです
10分もしない内に膣はほぐれきって、彼女
一層腰を激しく動かした。あなたも一緒に
絶頂を迎えることにした。

「んきゅううううう♡

中出しされてますうううう♡」

絶頂を超えた後、彼女は騒ぐこともなく

落ち着いて呼吸を整えていた。

「……はあ……はあ……あれ？」

壁にがちり嵌っていた尻が

ふわふわと浮き、自由に通り抜けが

できるように戻っていた。

「……まさか私を落ち着かせるために？」

「……ありがとうございました♡」

壁に嵌った尻がエロかったのが一番の理

それはそつと胸にしまっておいた。

とろー

目覚めたら尻が顔に乗っかっていた。
彼女の寝相の悪さは、日に日に
アクロバティックさが増しているようだ。
「……そんなにくっつかないでくださいよお……えへへ」
寝言のようだ。幸せな夢を見ているのだろうか。
だが彼女は目覚めたらきつと、羞恥心で顔を
真っ赤に染め理不尽な暴力に訴えるだろう。
「アイスですか……？」
じゃああいただきます……むにゃむにゃ
朝立ちしたチンコが彼女の頬に当たる。
そして、彼女はそれを何と間違えたのか
いきなり啜え込んだ。

ト……

ト……

ト

ちゅわん

ちゅわん

ちゅわん

「ちゅわん、じゅるる♡…このアイス冷たくないで
も…でもこの味どこかで食べたような…じゅっぽ
アイスでなくチンコなのだが、彼女は一向に起
「んう♡…なんでしよう…私…体が熱くなっ
ちゅわん越しに鼻がクリトリスを刺激する。

もぞ

もぞ

「このアイス…何味なんですか…？ガチガチで
全然溶けないです…でもクセになりそうです♡
頭を振り子のようにして、一心不乱にチンコに
「ちゅわんと溶けてきました…♡
先っぽからお汁が出てきてますう♡」

ちゅわん

ちゅわん

「んぶおおお♡…な、何か出て…なんですかこわ
…アイスが爆発しましたっ！」
アイスという名の肉棒が特濃ミルクを噴射した

「んああ…とこころで納涼には冷たいものもいい
逆に汗をかくといいらしいですよ…？」
…つまりその…エッチなこととか♡」
発情した彼女が夢の中でエッチを始める前に
叩き起すことにした…



「たくさん出てます…♡ドロドロで濃い精液…私の手が気持ちよか慣れた手付きで根本から絞り上げ、最後の一滴まで絞り出した。」
「その…不凍者ですが…これからもよろしくおねがいします…♡」

すげー♡

あなたは答える。

「……♡」
しばらくお風呂場でイチャついた。



「こんな所でなんて…でももうガマン
出来ませんっ♡
思う存分奥に来てください♡」
「んああっ♡奥にガンガン来て
気持ちいいところたくさん擦れてますっ♡」

デート終わり、休憩
向かったが、彼女け
見えなため、一人
門前払いされてし
燃え上がった気持
近くの公園の茂み
始めてしまう。

「んあああっ♡気持ちいいっ♡やっぱりせつくしゅ最高ですううう♡
もつと…もつとおお♡」
溜まった性欲が弾けて淫乱になる彼女。
「出してえ♡おちんちんから濃いのは出してくださーい♡
あなたが射精するための最大限の動きでおねだりして来た。」

「デートが始まった
疼きっぱなしでお
濡らしてました！
獣みたいに犯され
満たされまくって
精液搾り取ろうと
腰振っちゃいます
完全に周囲の情報
シヤットアウトさ
セックスのことに
なくなっているよ

接合部から愛液と精液が溢れ、混ざり合いながら地面に落ちてい
「はあ…はあ…はあ…帰りましたよっか♥」
彼女はあたなの腕に寄り添い、帰る途中も幸せそうな笑みを崩さな

「んうううううううう♥
までおまんこいっ
締め付けちゃいま
ちんこが脈打つ度
子宮口が亀頭に吸
んっ…ああっ♥…
…幸せです♥」

「んあっ、ああっ♡おまんこすっごく気持ちいいです♡
おちんちんもたくさん気持ちよくなったださい♡」
飛び跳ねるように体を動かかし楽しそうにセックスを堪能していた。
「ふふ…こそうすると違おうとこころ擦れてんああっ♡
今いい感じに動きが合いましたね♡」
好奇心が止まらない。
エッチに対して従順になり、気持ちよさを探求していった。

「私、凄く恥ずかしいことしてますわ
や、やっぱぱり深く考えるのは止めま
揺れる大きな胸、エロい腰使い、甘い
一挙手一投足があなたを誘惑する。」



「んああっこれ凄いわっ♡お腹持ち上げると…んあ
その日の気分や着ている衣服一つでも感じ方は変わる。
いるんな動きでまだ感じたことのない快楽を探し貪り合う。
「気持ちいいっ♡気持ちいいっ♡」
セックス好きは…たまりませんっ♡」

不意に彼女はビクンと反応させ、
感じまくっていることがよく伝わっ
「あっあっああっ♡もうっ…っ…わらひ



「イくううううう♡んああああ♡♡♡」
「気持ちよすぎてバカになりゆうううう♡」
「はあ…はあ…もうずっとこのおちんちん離したくありません…
肩で呼吸をし興奮が冷めやらない。」

「まだ…ガチガチですわね♡…空っぽ
今日は朝まで寝かせませんよ♡」
「これからも彼女はきつと求めた分だけ
強く求め返してくれるだろう。」
この時が許される限り。」